

### 戦争のあったころ

とって人生の一つの節となるこ 験と呼ぶ。 れぬ実感がある。それは当人に るとき、われわれはそれを原体 の上に支配的な影をおとしてい ともあるのだ。その体験が人生 ぬ体験がある。説明してもしき 人にはそれぞれぬきさきなら

雪の夜を

雪の夜を

死に直面させられたことであっ 僕の場合、それは戦争であり、

撃は死を意味していた。「身を鴻 徴集で、文科系の学生の大半は た。こうした死の美学をあえて さいの「なぜ?」は許されなかっ 聞かされていた。そこにはいっ 戦って死ぬことは「悠久の大義 毛の軽きに置いて」いさぎよく 言葉であり、敗戦の兆しがよう 代であった。「死んで還れ」が合 駆り立てられた。「大君に召され 弾される時代であった。 否定する者は、非国民の名で糾 を意味することではないと言い に生きる」ことで、決して「死\_ やく見えはじめたそのころ、出 ことが日本男児の誇りである時 (しこ)の御盾」として出陣する る」ことを栄光と受け止め、「醜 「ああ、たったまんまで死ん 昭和十八年十二月、学徒臨時

あった。ぼくは生まれて初めて は、いいしれぬ倦怠感だけが 来の前に立ちつくしていぼくに い思いでもなく、閉ざされた未 でいくんだ」

灰色の青春は、なに一つ楽し

雪の夜を わたしの歌はどこえやら

> わたしの歌があったとて 雪の夜を 永 秀雄

立ちて崩るる… 榾火のあかく

う言ってくれた。 があった。出陣の決まった十月、 大学の壮行会で、文学部長はこ そのぼくにも、一つだけ救い

おり、教授がいて学問の灯はしっ どんなことがあっても生きて 顧の憂いなく大学の門を後にし とには、講師がおり、助教授が ばで出征するが、きみたちのあ 還ってきてほしい…」と。 てほしい。しかし、きみたちは かり護りつづけているから、後 葉で励まされたことは、僕を勇 である「生きて還れ」という言 学徒半ばで出征するのだから、 「きみたちは不幸にして学徒半 ぼくは感動した。当時タブー

たまるか\_ 「よし、生きて還ろう。死んで

気づけて充分だった。

ても、ぼくは人殺しの練習を拒んだ の授業を放棄した。たといそのこと もか」―ぼくはそのとき以来、教練 ぼくは唖然とした。「大学よおまえ れていた。中学生のころから、あれ 役将校の号令の下、 学当初のことである。運動場では退 によって卒業証書が与えられぬとし を何回やらされてきたことだろう。 き刺す、いわゆる刺突の訓練が行わ 大学の軍事教練を拒否したのは入 銃剣で藁束を突

心である。 それはざっとつぎのような譬話が中 しい魂」として教えてくれたもので、 ントの門を叩いた詩人シラーが「美 た。そこで学んだものは「死の美学」 ではなく「生の美学」であった。カ その大学で、ぼくは美術を専攻し

思い、 の旅人は、男の倒れているのを見て て病院に男を預けて治療を頼み、名 の中を隣町まで歩いていった。そし すから」と言い残して立ち去った。 通りかかった男は、倒れた男の傍に 彼は歩く力も起き上がる力もなく雪 前も告げずに立ち去っていった。こ をかつぎ上げ、彼を背負ったまま雪 男は、病人の傍に寄るといきなり彼 ところがつぎに通りかかった第三の に着いたらすぐ救助の人びとをよこ 寄ったが、隣の町まで彼の道づれを 見ぬふりをして通り過ぎた。つぎに に埋もれていた。通りかかった一人 したのでは自分の命も危うくなると 雪の中に男が行き倒れていた。 「しばらくの辛抱だ。隣の町 の第三の男の

わずの一年有半が続いた。

東京帝国大学入学当時の礒永秀雄 の果敢な行動 そ美があり、 を支えている 彼の美しい魂 無条件に人の 話であるが、 のである、と。 が、愛と奉仕 生命を救い 行動の中にこ **ア人」に似た** ゙゚よきサマリ 「聖書」の きかけたとたんダイナマイトが爆発 食わずのところへ食糧が届き、 して木っ葉になった下士官。飲まず

を捉えて離さなかった。 きっていくこの行動の美学は、 ぼく

生の美学

すためにこの世はあるのではない」 ということである。 にこの世はあるのではないか」 「おのれを生かし、人を生かすため 裏返せば「おのれを殺し、人を殺

# 死を待つだけの戦場

ごめんであり、人殺しはなおさらお 幹部候補生の例外である。死ぬのは 断りである。もし将校にでもなれば、 しれぬではないか。 いつどこで人殺しの命令を下すかも 軍隊では一平卒で通すことにした。

ことを誇りに思ってもいい、と思い

北 器の猛爆撃の下で、トカゲの鳴き声 舟艇をアメリカ軍の爆撃でやられて に追いやられた。ニューギニアの西 寄せ集められ、新しい一個連隊が編 である。船舶工兵とは言いながら、 成された。そしてそのまま南の孤島 師団に転属させられ連日にわたる鉄 を持ったまま、もと関東軍の歩兵の チウベシトモ思ワレヌ」兵士たちが しまい、生き残り組は、短い騎兵銃 フィリッピンでは「モノノ用ニ立 赤道に近いハルマヘラという島

生命はどれだけおびただしい数にの 死んでいくだけの毎日を送った。 林生活の中の自給自足生活で、ただ た友は、ものの三十メートルもいか のだ。その島でも極度の重労働と栄 ぼったろう。戦わなくても殺される 渦に巻きこまれ、海の藻屑と消えた 離れた山中の兵器監視小舎に取り残 ないと思って湿った導火索に息を吹 毒矢で殺された斥候兵。 点火してい た今、手を振って監視小舎を立ち去っ た輸送船はまたたくまに沈む。その に死んでいく。機関部に魚雷を受け され、労役だけは免れたものの、密 **最期を遂げた。密林の中でゲリラに** ぬうちに適戦闘機の銃弾であえない ぼくはやがて中隊から四十キロも 人が死ぬ。つぎつぎにいとも簡単

> た学生兵。まだある。まだまだある。 知って気が狂い、脱走し、銃殺され 食にしなかったばかりに飯を食って とも言わず、「オカアサン」とも叫 た初年兵。病苦の余り自ら命を絶っ ていった。 ばず、南海の孤島にひっそりと朽ち みんな「テンノウヘイカバンザイ」 死んだ召集兵。郷里の沖縄の敗戦を

ことなのだ、死は。それにはなにか 順番のようなものがあって、みんな 早晩そこへ追いやられるのである。

### 飢えの中で

薬まで食べた。激しい腹痛を起こし 界である。 たことはいうまでもない。餓鬼の世 ようかんに似ていることから黄色火 は食べ、下痢をすれば止すのである。 いたるまで手あたりしだいに採って 食糧がない。だから植物から虫に

受けたりすることになり、食うや食 まで学んだ斬込隊のゲリラの特訓を くはあえて殺生をはじめた。 の中で見通しの悪い梢にとまる鷲は ぼくは射撃に自信があった。密林

養失調で戦友はばたばた倒れた。たっきと泣き声が夜っぴいて続いた。や 鳥は射たないことにした。

#### 人を焼く

受領に来るようにと連絡を受けた。 り、マラリアで病死した戦友の遺骸 大男だった戦友は、 山の向こうの谷に野戦病院があ 痩せ細って死ん

流動

絶望を乗り越え、生涯青春に

うにという指示であった。衛生兵 に、右の手は焼いて遺骨を取るよ の中に穴を掘って埋葬するよう 先をメスで切り取ると、パラフィ の手を借りて埋葬を終え、右の手 に抛りこんでぼくに渡してくれ ン紙にくるみ、飯盒の中に無造作 でいた。軍 た。遺体は毛布にくるみバナナ林 医は戦友の右手首から

どうしようもない。しかたのない

油をふりかけ、消えそうになる火

をかき立てながら、半日近くか

かって焼いた。くすぶりつづける

した。銃の手入れ用のスピンドル

は持ち帰って密林の奥で荼毘に付

肉の臭いは、

毛やラシャを焼くあ

かった。

バナナ畑

には墓標を立てい行っ

何度水を浴び

ひてもなかなか消えな

た。なじみの薄い戦友で召集兵

の毛穴という毛穴にしみこんで、 入れて持ち帰ったが、屍臭はぼく な骨を拾い、

携帯燃料の空き缶に

の臭いである。やっと残った小さ

りきれなかった。ぼくはそれ以来、 ぶっつかり、こちらの宿舎の屋根に もう一羽を招き寄せようとした。し あたり、それは壮絶ということばで のみえるはずはない。あちらの木に 舎のほとりを飛びまわった。夜、眼 れあいを求めて生き残った一羽が宿 うのはいるんだな」と思ったりした。 かし寄り付かないのである。「仲の すかった。飢えをしのぐために、ぼ い鳴き声と羽ばたきで、たしかにつ ところがその夜のことである。激し よい鳥の中でも薄情なつれあいとい とした。それをオトリにつれあいの 撃てなかったが、山鳩やオウムは比 しか形容のできない不気味な羽ばた 較的低い枝にとまるので目標にしや ある日一羽の白いオウムを撃ち落

> 美しさでぼくに迫った。ぼくはそ 本の野山と水の色は、さわやかな ら十か月めである。久々に見る日 のときはっきり詩人を志した。奪 はくは生き永らえて四 酉の土を踏むことがで 一十一年六月、敗戦か うしおの果てに咲く花の 海原の 今日は 白きを

きた。昭和三 年ぶりに故国

さいわいば

る」―ぼくはただ猛烈に生きた とっては詩であった。「詩を生き ればならなかった。死線を越えて 永遠の青春につながるものでなけ なるまい。生死とともにあり、か つ生死を超えた一点が、ぼくに 吋に帰着点でなければ つねに出発点 み、まやかしには真っ向から対決 いつづけ、生存のあかしを詩に刻 のように、おのれの生きざまを問 いかねば済まぬ気がした。 ぼくは彼らの分を含めて、凋まな た。ぼくは生き残ったからには、 い白い花を、日々咲かしつづけて 僕は死んだ戦友に語りかけるか

であり、同時

たどり着いた処は、

思った。 つながる生き方をしていこうと

えながら、激しく詩を人生を生き さであり、ぶざまな生き方しかで を養いながら、さらには妻子を抱 であった。ぼくは心から感動した。 り集まってはぼくの死を無駄にす きないおのれのさがの拙さであっ 死んだ戦友たちに対する後ろめた とき、きまって還ってくるのは、 前に幾度か夢がみじんに砕かれた ようとした。しかし厳しい現実の まいと誓い合っているということ てっきり戦死したものと思い、寄 たっても音沙汰のないぼくを、 たまま消息を絶ち、敗戦後一年 復員後は年老いた引揚げの両親 高校時代の友人たちは、出征し

だけがあった。 いたものはすべて背後に捨てて、 いつもただ出発だけがあり、戦い **童話を、小説を書きまくった。書** しかしぼくは詩を、ドラマを、

## 用意していた墓碑銘

して合掌しながら、死者の冥福を かげが浮かんできた。ぼくは瞑目 だったが、急に親しい想いでおも

祈る経文の

よかったものをと、なすすべを知 らへの鎮魂歌を求めていたゆえと らぬ自分になさけなかった。今に それは同時にみずか つでも習っておけば るのは、はたして何に、そして誰 ぼくの墓碑銘にと心組んでいた。 はひそかにそれを「絶唱」と呼び、 に、という自問自答だった。ぼく む詩があった。ぼくの生命を捧げ の木の間から海を眺めては口ずさ 南の孤島に生きていたころ、山

も思われる。

生き永らえて

して思えば、

かった。あらゆるまやかしを拒否 われた青春は奪回すべく、それは せずにはおれなかった。 戦友の誰彼たちは死んでいっ